

# 蓮如の信仰

吉 田 宗 男

## はじめに

真宗の信仰を論ずる時、親鸞は当然として、特に、注目していかねばならないのが蓮如であろう。蓮如は、中興の祖とされ、現在に見られる真宗興隆の礎を築きあげた。そういったことからすると、また、蓮如が、再興の祖といわれていることも頷ける。ところが、再興の祖としての蓮如像が、ややもすると、ただ単に真宗勢力の拡大を実現させた政治家、あるいは実業家としてだけの姿が先走ったような形で捉えられている嫌がある。また、「先師十五歳よりはじめて真宗興行の志し頻にして」『蓮如上人遺徳記』・真聖全三・八七一頁）という宗教家としての使命感ばかりが先行して、親鸞の精神を喪失させたという内外からの批判も少なくはない。確かに、現代人が、中世という社会的に混沌とした時代を生き抜いてき

た蓮如を評価する時、政治家、実業家、あるいは宗教家といったレッテルを与えた方が、理解しやすいの否めないことである。しかし、そういったことだけで理解を終えたのならば、親鸞から今日に至るまでの長き時代に渡って、まさに群萌とよばれる無数の人々の心を捉えたものは、何かということとは永久に謎のままであろう。そこに、一信仰者としての蓮如像というものが打出されてこなければ、真宗の理解も成り立ちえない。中興、あるいは再興ということは、まさに、親鸞が浄土の教えを真宗とおさえた信仰の中興であり、再興なのである。そういったことを念頭に入れ、蓮如の信仰を窺っていくこととする。

## 一 信心正因

末法の世に生きる群萌にとっての根源的欲求は、浄土

往生にあった。末法という言葉にも象徴されているように、法というものが失われつつある時代に、確固たる依り所を求めようとするのは当然のことであろう。そういった群萌の依り所が浄土であり、その浄土に往生することが、まさに根源的欲求であった。その根源的欲求の具体相が、信仰なのである。ここで大きく問題となるのが、浄土往生の正因となるのは何かということであろう。それを明らかにすることによって、信仰の内幕が明確化され、揺るぎない信仰が確立されるのである。

親鸞は、龍樹が指摘した仏道を歩んでいく歷程に、難行道と易行道があることに注目する。そして、末世の凡愚が歩んでいくことができる道は、一体どういった道かを自己に問い続けていった。そのことは、親鸞が七祖と仰いだ曇鸞も同様で、『浄土論註』に、

易行道は、謂くただ信仏の因縁を以て浄土に生ずと願ず。仏願力に乗じてすなわち彼の清浄の土に往生を得。<sup>①</sup>

とあるように、易行道の歩みに目を向けていたのである。何故、易行道に浄土往生の正因が約束されるかというと、それは仏願力に乗じているからである。そこでは、難行道のように、成仏に向かうために自己の行に重点を

おくのではなく、願行共に仏によって用意されているのであるから、群萌の凡愚においては、如何に、その仏願力に乗ずるかということに重点がおかれてくるのである。その仏願力に乗ずるということを信とったのが、親鸞であった。そこに信心正因ということが信仰の中核に据えられる所以となってくるのである。

この信心正因ということとは、称名念仏を正因とした浄土教他流に対する親鸞の教義の一大支柱である。蓮如は、特に、この点に着目して信仰ということを考え、そして、教化に繋げていった。蓮如は、聖道の諸宗及び浄土教他流は勿論のこと、同じ真宗の他派をも意識して、親鸞以来の教義の普遍化を目指したことはいうまでもない。蓮如自身、聖道の諸宗よりも、同じく、念仏往生を打出している浄土教他流あるいは真宗の他派に対して、どのような態度で親鸞の正統性を訴えていくかが、大きな課題となっていたのである。そういった意味でおさえたいったとき、真宗の再興が、ただ単に、教団を大きくすることではなくて、その本意は信仰の再興であったと領くことが出来るのではなからうか。

念仏往生ということが、浄土門の教義として長い伝統を持ち、念仏の一行による浄土往生を主張したことは周

知のことである。しかし、浄土に往生する正しき因は、信心であるという信心正因の立場は、親鸞以外あまり認められない。この信心正因の立場は、「信巻」・三一問答の、

涅槃の真因はただ信心をもつてす。<sup>②</sup>

という信心為本のおさえから導きだされたのである。ここでいう涅槃の真因とは、涅槃の果を証し得る真実の業因であり、その真実の業因が、「ただ信心をもつてす」とされているわけである。そうすると涅槃の果を証するという成仏と浄土に生まれるという往生の関連性が、当然のごとく問われることになってくる。親鸞の場合、

念仏の衆生は、横超の金剛心を窮むるがゆえに、臨終一念の夕、大般涅槃を超証す。<sup>③</sup>

という往生即成仏によって、その関連性を領くことができるが、このように業因が一つであるということは、末代無智の凡愚のはからいでは到底及ぶところではない。つまり、末代無智の凡愚というところに焦点を当てた時、往生即成仏ということは自因自果である自力では成り立たないのである。そうすると、「ただ信心をもつてす」という信心は、自力ということではおさえることはできない。そこを蓮如は、『御文』の中で、

親鸞聖人のすすめましますところの他力の信心ということを、よくよく存知せしめんひとは、かならず十人は十人ながら、みなかの浄土に往生すべし。<sup>④</sup>

とあるように、信心に他力という語を修飾させて、信心の本質をおさえなおしていることが、蓮如における親鸞の深意の領解であると窺えよう。蓮如のこの他力の信心というおさは、勿論、親鸞が「信巻」で、

「信心」と言うは、本願力回向の信心なり。<sup>⑤</sup>

とされた領解に基づき為されたものであるが、さらに、それ、当親鸞聖人のすすめましますところの一義のころというは、まず他力の信心をもつて肝要とせられたり。この他力の信心ということを知りたくしらずは、今度の一大事の往生極楽はまことにもつてかなうべからずと、経釈ともにあきらかにみえたり。と述べて、他力の信心という他因から往生極楽の正道へ至るという他果まで見据えているのである。

親鸞の他力の信心の領解は、経論釈の厳密なおさえから培われたものであることはいうまでもない。経の中心が、『大無量寿経』であり、論は世親の『浄土論』、釈は曇鸞の『浄土論註』である。特に、『浄土論』『浄土論註』の一心に注目し、この一心を「金剛の真心」、そし

て、「真実の信心」と転釈していく。この「真実の信心」こそが、我々凡愚のはからいを超えたところにある信心であって、それを蓮如は、他力の信心と領いているわけである。ここに浄土教他流との大きな違いがある。称名正因を前面に打出してくる浄土教他流に対して、蓮如は、この三心結釈にみられる信心と名号との関係を論じているところの

真実の信心は必ず名号を具す。名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり。<sup>⑦</sup>

を依り所として、称名正因を掲げる浄土教他流に対している。この信心と名号の関係からいくと、名号ということとを前面に打出しても、名号は必ずしも願力の信心を備えているわけではないといっている。ところが、真実の信心は必ず名号を具すとある。ここに信心と名号の位置関係がはっきりとおさえられていることが窺えよう。それは、信心の体として願われるのが名号という位置関係である。そこには、浄土教他流が強調するような称名正因の立場を根底から問い直さざるを得ないおさえが為されているのである。

親鸞および蓮如は信心の体を名号とおさええている。だから、信心のあるところには、必ずその体である名号が

存在するのである。そして、その名号が法蔵菩薩の因位による願行であるということは善導の六字釈から明確に窺えるであろう。我々凡愚が三世において無有出離の機であるために、救済を発願したのが法蔵菩薩であるが、その法蔵菩薩の因位の願行は、名号ということを通して我々衆生の面前に顕現してくるのである。そうすると名号と称名の立場の違いが明確化されてくる。その立場を、名号は仏の側から衆生に廻施されるものであり、称名は衆生の側から仏に対して、確かに名号を頂いたという領きと捉らえられるのではなからうか。そういった立場に立った時、称名正因ということは必然的に否定されてくるであろう。親鸞の遺志を受け継ぐ蓮如は、そのところをしっかりと見極めたのであった。そのことは蓮如のそれ、南無阿弥陀仏ともうす文字は、そのかずわずかに六字なれば、さのみ功能あるべきとおぼえざるに、この六字のうちには無上甚深の功德利益の広大になること、さらにそのきわまりなきものなり。<sup>⑧</sup>

と、仏から衆生に廻施される南無阿弥陀仏という六字の名号には、法蔵菩薩の願行による広大な功德利益が込められているとおさえ、その名号を聞いて信心歓喜する信の一念において、即ち往生を得ることができるとおさえ

ているのである。ここである名号を聞いて信心歡喜する信の一念が、衆生から仏へ対しての願きであるということはいまでもない。この願きがあるからこそ、名号が名号としての用をもって衆生の前に顯現することができるのであって、この願きがなかったのなら、名号としてはあってもその用を衆生は感得することができないのである。

以上のような視座に立つて蓮如は、信心正因ということに親鸞の願きをみてとったのである。

## 二 称名報恩

浄土教他流の主張する称名正因に対し、信心正因のおさえて親鸞の正統の立場を打出した蓮如であるが、そうすると、当然、称名の位置付けが問題となってくる。前章において、信心の体として名号があり、その名号は法蔵菩薩の因位の願行であって、法蔵菩薩の因位の願行を我々凡愚の前に顯現させ、それを衆生の願行へと移行させる媒体が、名号であるとおさえた。蓮如は、往生の正因を親鸞の信心為本という立場から信心とみてとったため、浄土教他流の主張する称名が往生の正因とならないという位置付けは、当然、廃捨されなければならないこと

であった。それでは名号を称えるという称名ということは、どういった意味があるのであろうか。

蓮如の称名に対する位置付けは、仏恩報謝というところにあった。その仏恩報謝というおさは、『大無量壽經』の第十八願文、及び本願成就文から由来する。第十八願文には、

たとい我、仏を得んに、十方衆生、心を至し信樂して我が國に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれずば、正覺を取らじ。<sup>⑨</sup>

と、ここには、至心・信樂・欲生の三心の信と乃至十念の称名の行が誓われている。そして、その本願成就文には、

あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。心を至し、回向したまえり。かの國に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。<sup>⑩</sup>

と、衆生が名号を聞いて、信心歡喜する信の一念において、即ち、往生を得るということがいわれている。そういったことから前章で述べたように、信心を往生の正因とする信心正因の立場がおさえられるわけである。信心歡喜する信の一念において、往生を得て不退転に住する

のであるから、その不退転に住してからの乃至十念の称名の行ということは、当然、生涯に渡って信を相続する行であると頷けよう。この十念は、曇鸞が『浄土論註』に述べているように、

この十念は、無上の信心に依止し、阿弥陀如来の方便莊嚴・真実清浄・無量功德の名号に依って生ず。<sup>⑪</sup>

と、無上の信心に依って裏付けられている名号から生ずるものとされている。ややもすると、一念と對比させて、時節の長短で考えがちであるが、この十念は、あくまでも、

「念」と云うは、この時節を取らざるなり。ただ阿弥陀仏を憶念して、もしは総相・もしは別相、所観の縁に随いて、心に他想なくして十念相続するを、名づけて「十念」と言うなり。ただし名号を称すること、またかくのごとし。<sup>⑫</sup>

とあるように、時節の長短で論じられるものではないことが分る。さらに、

「十念」と言うは、業事成弁を明すならくのみ。必ずしも須らく頭数を知るべからざるなり。<sup>⑬</sup>

から明らかなように、十念は往生の業が全うしたということを示すだけで、必ずしも念ずる数の多少を云々する

必要はないとしている。このことは、称名についても全く同じであるという指摘も為されている。つまり、信の一念において往生が定まり、その後の十念相続の上にある称名も、往生が全うしたということの証に他ならない。そうであるならば、我々衆生の側の想いとしては、『浄土和讃』に謳ってあるような、

弥陀の名号となえつつ

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

仏恩報ずるおもいあり<sup>⑭</sup>

の仏恩報謝ということが大眼目となることも頷けるであろう。

そういったわけで、蓮如は、『御文』において一貫して称名を仏恩報謝のためとする。特に、そのことは、一帖目第四通において、信心治定して後の称名は自身の極楽往生のためなのか、それとも仏恩報謝のためなのかという問に対して、

一念の信心発得已後の念仏をば、自身往生の業とはおもふべからず。ただひとえに仏恩報謝のためとこころえらるべきものなり。<sup>⑮</sup>

と答えた。このおさえは、善導が「散善義」の中で述べ

た「上尽一形 下至一念」に依っていることを次に続く文に明白に述べている。このことを、覚如も『口伝鈔』に、

下至一念は、本願をたもつ往生決定の時剋なり。上尽一形は、往生即得のうえの、仏恩報謝のつとめなり。<sup>⑭</sup>

と述べており、蓮如は、この覚如のおさえに倣い、

されば、善導和尚の「上尽一形 下至一念」と釈せり。「下至一念」というは、信心決定のすがたなり。

「上尽一形」は、仏恩報尽の念仏なりときこえたり。<sup>⑮</sup>

と、称名の意義を仏恩報謝と導き出したのである。このように善導が「散善義」でいうところの「上尽一形 下至一念」が、名号を称えることの意義を明確化させたのであった。善導の「上尽一形 下至一念」のおさえは、勿論、『大無量寿経』の第十八願文、及び願成就文を踏まえてのことであるが、善導は、『観無量寿経』に依ることによって、さらに、深めていったのである。それは、『観無量寿経』の

この功德を具すること、一日乃至七日して、すなわち往生を得。<sup>⑯</sup>

を釈して、

まさしく修行の時節の延促を明す。上一形を尽くし、下一日・一時・一念等に至る。あるいは一念・十念より、一時・一日・一形に至る。大意は、一たび発心して已後、誓てこの生を畢るまで、退転あることなし。ただ浄土をもって期となす。<sup>⑰</sup>

とみているところから窺える。『観無量寿経』でいうところの三心（至誠心・深信・回向発願心）を具足して三種の善行を修めた功德を回向して浄土に往生したいと願った時往生を得るといつているわけであるが、そこで問題となるのが、まさに修行の時節の延促である。そこには、下は一念から上は一生涯という時節の長短があるが、しかし、一たび発心したのならば、退転することはないとしている。この一たび発心したその時が、一念ということで、これを覚如は、「本願をたもつ往生決定の時剋」とし、蓮如は、「信心決定のすがた」とみたのである。

そのようにみていくと、善導は、一念と一形ということとを、対比的に時節の長短で捉えてはいないということが分るであろう。一念という「信心決定のすがた」である「本願をたもつ往生決定の時剋」を迎えることによって念仏の行者としての一形、つまり、一生が始まるので

ある。そういった念仏の行者の一生は、本願により往生が決定しているので、その一生における称名念仏の在り方は、時節に重きを置く聖道的行というよりも、まさに、信の一念によって往生が決定し、そのことを願っていく信の相統といえるであろう。そのすると、その信の相統の内実は、当然、往生が決定したことに対する仏恩報謝となることは明白である。

このように、覚如・存覚をはじめとして蓮如が、称名報恩の立場に立った背景には、信という一点に自己を照して仏道を歩んでいった親鸞の伝統があったことはいうまでもないことであろう。信の一点で仏道の歩みをみていった時、信の一念において往生が決定した後の歩みは、仏恩報謝以外の何ものでもない。つまり、信心正因と称名報恩は一つのこととして捉えられねばならないのである。

### 三 平生業成

蓮如は、自身の信仰をただひたすら親鸞の教えによって確かめていくとした。それは蓮如のみならず、覚如・存覚も同じことである。それぞれが親鸞の教えに自身を照し、ある時は頷き、また、ある時は反省をして信

仰を深めていった。勿論、それは個々の信仰のみに止まらず、多くの人々の信仰が歴史の中で受け継がれていて、はじめて真宗の信仰が確められていくのである。そういったことからすると、真宗の歴史は、信仰の歴史ということができであろう。

蓮如は、信仰の内実を信心正因・称名報恩ということでおさえていった。それをさらに、平生業成の義に撰している。平生業成とは、日常に他力の信心を得たその時に、往生の業因が成就し、浄土に生まれる身に定まるということになるが、そこにはあくまでも信心正因・称名報恩ということが念頭にあることはいうまでもないことであろう。

平生業成という言葉自体は、親鸞の著作の中にはみられない。この言葉をはじめて用いるのは覚如である。覚如は、当時、異義が横行していたため、邪義を廃し、正義を顕わすために『改邪鈔』を著わす。この『改邪鈔』が批判している異義は、大きく分けると、「寺院観」「門徒行儀」「安心」に三分されるが、特に、安心論についてが中心となっている。当時、仏光寺系の名帳・絵系図、あるいは知識婦命等の異義が横行していた。覚如の使命としては、安心と起行についての分別をなし、起行を正



因とすることを否定し、信心正因の立場を主張するといふところにあった。そうすることによって親鸞からの血脈の正統性を訴えていたのである。そういった使命を持って著した『改邪鈔』の中で、

「即得往生 住不退転」等の經文を持って平生業成の他力の心行獲得の時刻をききたがえて、「名帳勸録の時分にあたりて往生浄土の正業治定する」などばし、ききあやまれるにやあらん。<sup>②</sup>

と、名帳に名前を勘録した時に、往生浄土が定まるといふ邪説に対する言葉として用いられたのである。末法の世に生きるものにとって、何時、往生浄土が定まるのかということは深刻な問題である。親鸞自身もそのことが生涯の課題であった。親鸞は、往生浄土の定まる事実を『大無量寿經』下巻の本願成就文の

あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。<sup>③</sup>

にみていき、ここから、「一念」に着目し、

「一念」は、これ信案開發の時刻の極促を顯し、<sup>④</sup>  
と、「即得往生 住不退転」の時刻をみていく。また、

『末燈鈔』において、淨信房の

一念發起信心のとき無碍の心光に摂護せられまいらせ候うゆえ、つねに浄土の業因決定すとおおせられ候う。<sup>⑤</sup>

という、仏の誓いを信ずる心が一度起った時、仏の心光に摂護されるので、その後は常に浄土に生まれる因は定まっているという領解を大いに慶んでいる。このように、往生浄土が定まるといふ事実をどこでおさえるかが、親鸞の教えを受け継いでいく者の使命でもあった。これらをしつかりと見据えて、覚如は、聞信の一念に即得往生の益を受ける事実を「平生業成」といふ言葉で以て表現していったのである。

それを受けて、この平生業成といふことを存覚は、『浄土真要鈔』に、

平生業成といふは平生に仏法にあふ機にとりてのことなり。もし臨終に法にあはゞその機は臨終に往生すべし。平生をいはず臨終をいはず、たゞ信心をうるとき往生すなわちさだまるとなり。これを即得往生といふ。<sup>⑥</sup>

とあるように、先ず、平生業成とは、平生に仏法に遇う機にとっていふことであるとおさえる。平生とはどうい

うことか。我々はややもすると、平生と臨終というように、それぞれを時間的な対局において平生を捉らえてしまいがちである。しかし、覚如は、このことを懸念して、「平生をいはず臨終をいはず」とあるように、平生と臨終を共に否定する。それでは何が重要かというと、平生時、臨終時という時間が先行するのではなく、あくまでも、仏法に遇うということにおいて、平生あるいは臨終ということがみられていかねばならないのである。であるから、「もし臨終に法にあはざるその機は臨終に往生すべし」といえるのであろう。それは、存覚が指摘しているように、「ただ仏法にあふ時節の分齊」(真聖全一・一二七)を以て平生としていることが窺える。だから、臨終時に仏法に遇うことができたのなら、その時が平生といえるように、仏法に遇うということにおいて、はじめで平生ということがいえるのである。当然、そこには、「仏法にあふ」ということにおいて、「即得往生 住不退転」という本願成就文の裏付けがなされるということはいうまでもない。

さらに蓮如は、『御文』一帖目第四通で、

「一念発起 平生業成」と談じて、平生に、弥陀如来の本願の、われらをたすけたまふことわりをきき

ひらくことは、宿善の開発によるがゆえなりとこころえてのちは、わがちからにてはなかりけり、仏智他力の御さづけによりて、本願の由来を存知するものなりとこころうるが、すなわち平生業成の業なり。とおさえてくる。覚如・存覚の領解を受け継いだ蓮如の特徴としては、平生業成に一念発起ということを含め合わせて領解していくことが多い。一念発起は、一帖目第二通に述べられているように、

この信をえたるくらいを、『経』には「即得往生 住不退転」ととき、『釈』には「一念発起 入正定之聚」ともいえり。これすなわち不来迎の談、平生業成の義なり。<sup>⑤</sup>

と、『大経』でのおさえを『浄土論註』でおさえ直している。勿論、「一念発起 入正定聚」は、趣意であり、実際にはこの文の形でみられるわけではないが、『浄土論註』上巻巻頭の『浄土論』の大綱を述べるところの易行道釈に依ることは、「行巻」の

この行信に帰命すれば攝取して捨てたまわず。かるがゆえに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力と曰う。ここをもって龍樹大士は「即時入必定」と曰えり。曇鸞大師は「入正定聚之教」と云えり。<sup>⑥</sup>

と、行徳を挙げて行信を勧める引証により窺える。

このように親鸞が、「即得往生 住不退転」を他力により撰取不捨された時処と受け取り、それを龍樹・曇鸞によっておさえていく確かめを、蓮如は、さらに、一念発起ということで深めていったのである。また、この一念発起ということには、往生の業因が成就して、必ず淨土に往生することが決定するという業成の前提として、阿弥陀如来の本願が我等をたすけるということを聞き開いていくことがある。そして、この法を聞き開いていくその時が、平生といえるわけであるから、一念と平生ということが密接な繋がりをもっていることが窺えよう。一念とは、先述した親鸞のおさえからすると、「信樂開発の時刻の極促」ということであり、今、この「行巻」の表現を借りるのならば、「行信に帰命」するその時ということになる。これを総括すると、信心の開発ということになり、その信心の開発により、正定聚に入ることが決定するのであるから、それは、まさに信心正因ということになるであろう。

このように蓮如は、龍樹の易行道に基づく、即時に必ず仏となることに定まる位に入るといふ領きを、「入正定聚之教」と捉らえていった曇鸞の精神を親鸞によって

知ることができ、それを「一念発起 平成業成」とおさえていったのである。そして、平生業成に一念発起を兼ね合わせている深意は、まさに、信心正因の領きがあったわけであろうし、また、一念発起已後の念仏生活は、仏恩報謝の念仏生活という領きがあったのではなからうか。そうすると、まさに、平生業成に信心正因と称名法恩が要約されていることがわかるであろう。

## ま と め

以上、蓮如の信仰を、信心正因・称名報恩・平生業成の三点に視点を向けて論じてきた。そのことから、蓮如は、親鸞が領いた念仏の教えを、覚如・存覚によっておさえ、末法といわれる世において実践していったということが端的に窺えよう。その実践とは、親鸞の領いた念仏の教えに遇い、そして、領き、仏恩報謝していく念仏生活を御同朋・御同行とともに共有していくことにあった。それがまさに、信心正因と称名報恩に要約された平生業成という信仰の内実なのである。

## 註

- ① 曇鸞著『浄土論註』（真聖全一・二七九）
- ② 親鸞著『頭浄土真実教行証文類』より「信巻」（定親全

一・一五)

③ 親鸞著『願浄土真実教行証文類』より「信卷」(定親全

一・一五一)

④ 蓮如著『五帖御文』より二帖目第八通(真聖全三・四三

六)

⑤ 親鸞著『願浄土真実教行証文類』より「信卷」(定親全

一・一三八)

⑥ 蓮如著『五帖御文』より二帖目第十通(真聖全三・四三

九)

⑦ 親鸞著『願浄土真実教行証文類』より「信卷」(定親全

一・一三二)

⑧ 蓮如著『五帖御文』より五帖目第十三通(真聖全三・五

一〇)

⑨ 『仏説無量寿経』(真聖全一・九)

⑩ 『仏説無量寿経』(真聖全一・二四)

⑪ 曇鸞著『浄土論註』(真聖全一・三二〇)

⑫ 曇鸞著『浄土論註』(真聖全一・三二〇)

⑬ 曇鸞著『浄土論註』(真聖全一・三二二)

⑭ 親鸞著『三帖和讃』より「浄土和讃」(定親全二・三)

⑮ 蓮如著『五帖御文』より一帖目第四通(真聖全三・四〇

八)

⑯ 覚如著『口伝鈔』(真聖全三・三三)

⑰ 蓮如著『五帖御文』より一帖目第四通(真聖全三・四〇

八)

⑱ 『仏説観無量寿経』(真聖全一・六一)

⑲ 善導著『観摩四帖疏』より「散善義」(真聖全一・五四

三)

⑳ 覚如著『改邪鈔』(真聖全三・六四)

㉑ 『仏説無量寿経』(真聖全一・二四)

㉒ 親鸞著『願浄土真実教行証文類』より「信卷」(定親全

一・一三六)

㉓ 親鸞著『末燈鈔』(定親全三・八四)

㉔ 存覚著『浄土真要鈔』(真聖全三・一二二)

㉕ 蓮如著『五帖御文』より一帖目第四通(真聖全三・四〇

六)

㉖ 蓮如著『五帖御文』より一帖目第二通(真聖全三・四〇

四)

㉗ 親鸞著『願浄土真実教行証文類』より「行卷」(定親全

一・六八)